

◆【海員随想】BISKRA号航海記(24)① 新木繁雄

8月22日 アルジェ接岸中

C/Oが「デッキ・マシン用の作動油をヘッドタンクへ上げるハンドポンプが全然きかないから見てくれ」と言ってきた。この理由は1つしかない。ポンプのウイングをスピンドルに固定してあるピンが折れているのだ。ハンドルを動かす範囲を超えて動かすとピンが折れる。開放してみたらピンを取り替えるだけでは直りそうにない。新しいポンプに取り替えるしかないようだ。取り付けフランジの口径さえ合えば、ヨーロッパの製品でも構わない。機関長に注文させよう。

昼食後、ビシャルの小俣さんとVHFで話した。陸からの連絡は何も行っていないらしい。小枝さんから聞いた話として「9月4日まで沖待ちらしい」と話したら、びっくりしていた。検疫が済まないのでは上陸できないと言っているが、ここでは検疫官が沖泊まりの船へ行くことは絶対にない。本船の場合はフランスで検疫を受けているから、沖からボートで上陸しても、大目に見てもらえるようだ。

すぐ近くの岸壁にRORO船のタブラー号が接岸した。ギャランティが砂川元仁という沖繩の人だ。以前、本船の機関長と一緒に乗っていたことがあるようだ。お互いに気が合わずけんかばかりしていたという。機関長に言わせれば「元仁はトラブル・メーカーだ」と言う。事が起きると何でもけんか腰になるらしい。砂川さんに言わせると「あいつは最低の一等機関士だった」と言う。一緒に乗っていた時は、機関長は一等機関士だったそうだ。

8月23日 アルジェ接岸中

午後、小枝さん来船、ファクシミリで日本から送られてくる天気図をとってみた。先日はきれいに取れたのに、今日はノイズばかりで全然だめだ。電波の状態が良くないのだろう。ビシャルの小俣さんにVHFで連絡してみたが応答なし。オランかアンナバへ移動したのかもしれない。

機関長の奥さんは26日午後の飛行機でアルジェから帰るとのことだ。荷物をエルビア(駐在員の宿舎)で預かってほしいとタクシーで持っていった。

帰り、市場でメバルのような魚6匹とイワシ10匹を買ってきた。メバルはしょう油で煮付け、夕食に飯を炊いた。「魚の煮汁がうまい」といって、ダニエラは飯にかけて食べていた。

今日はイスラム教のラマダン明け、一晩中街中が大変なにぎわいだった。会う人ごとに、お互いに抱き合っあいさつする。やはり断食は日中だけとはいえ、つらいらしい。

「海員だより」